
名探偵コナン 円空の狙撃手<スナイパー>

土尾屋 ハタナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン 円空の狙撃手>スナイパー<

【Nコード】

N4834F

【作者名】

土尾屋 ハタナカ

【あらすじ】

コナンと謎の狙撃手>スナイパー<の攻防を描くサスペンス・アクション！！ 劇場版を意識した作風になっています。イメージを崩さぬよう執筆に努めますので、劇場版を見る感覚で少しでも楽しんでいただければ幸いです。アドバイス・評価等としお待ちしております！

プロローグ（１）（前書き）

仄暗い円空より舞い降りた、悪魔の射者を見つけ出せ！！

コナンと謎の狙撃手＞スナイパー＜の戦いの火蓋が切って落とされる！

果たしてコナンは、真犯人を見つけだし、次なる犯行をくい止める
ことが出来るのか？

最後まで物語を描ききるのが目標です。
最後までお付き合い下さい。

プロローグ（１）

手元に緊張感が走り、妙に力が入って指先が震える。

支えるもう片方の手の平も汗がにじんで滑る。

唾をゴクリと飲み込み息を吐くが、指先の力がうまく抜けない。

不意に軽い横風が吹いた。

ほぼ同じタイミングに思い切り指を引いた。

バーン！

防音用のヘッドホンをしていてもそのすさまじい音が、振動によって全身によく伝わってきた。

放たれた弾丸はしっかり狙って撃ったはずの標的にかすりもしていなかった。

「そもそも銃身の支え方が甘い。それでは、狙える物も狙えないがね？」

そう言つて、この真つ青な円空の色によくマッチした、お気楽な青いアロハシャツを着た眼鏡の男が背後から近付いてきた。

「良いか新一、しっかりと脇をしめるんだ。」

眼鏡の男は、新一と呼ばれる少年のライフルを支えて、目線を標的に合わせた。

「優作、そんなに新ちゃんに厳しくしなくたって良いじゃない？」

新一と共にライフルを構える夫に、防音用ヘッドホンで聞こえないと分かっている、思わず妻の有希子は叫んだ。

わざわざハワイに来てまでこの炎天下の屋外で射撃だなんて、この少年（子どもつばいと言った方が正しいか）二人のことを有希子には到底理解できなかった。

一人でビーチに行くのもどうかと思い、有希子は結局二人に付き合ってたが面白くない。少しでも雰囲気をと、屋外射撃場添え付けのパラソルの下でカクテルをちびちび飲んでいる。

「よし、標的は確認したか？」

「ああ、父さん」

新一が答える。

今度の構えなら大丈夫そうだ。

父の補助もあり以前より銃身の構えが楽になった新一は、二十メートル先の標的をしっかりと見据えた。

「風向きも見るんだ。弾道を計算して、標的の距離を測る。最後に呼吸を整えて、撃つ瞬間に息を止めるんだ。そうすれば自然と弾が狙ったところに吸い込まれる」

息を軽く吸い込み、息を飲み込んだ新一は軽く引き金を引いた。

銃声が響き、狙った先に豆ほどの大きさの穴が開いた。

幾重にも円の描かれた標的の中央近くだ。

優作の髭が右上に少し上がる。

「まあまあだな」

父は息子の肩を叩いた。新一はライフルを台に置き、ヘッドホンを外し優作に笑いかけた。

「サンキュ、父さん。」

まったく父と息子ってのは、とあきれ顔になりつつも有希子は遠目で軽い嫉妬を感じていた。

ヘッドホンを外しながら優作が続ける。

「狙撃は二人で一人だ。周りの状況を測量をする者、その情報を元に狙撃する者」

「確かに、父さんがいなきゃ何度やっても俺には無理だったよ」

ハワイの暑い日差しが三人を照らし、白く淡い光に包んでいった。

プロローグ（２）

二年後、現在。

三月も終わりにさしかかり、暖かい光の射し込む毛利探偵事務所。応接用のソファーには歩美、光彦、元太、向かいにはコナンと哀が腰掛けて、これから行こうとしているハイキングの話題で盛り上がっている。

探偵事務所の主：毛利小五郎は、集まりの場所に使われるのを良く思っていないらしく、背を向けてポケットラジオを聴きながら競馬新聞に熱中している。

小五郎の娘：蘭が子供たちにジュースを運んでくる。

「もうお父さん！お客様が来てるんだから、机くらい片づけておいてよ！」

彼の机は相も変わらず、たばこの吸い殻や新聞、何かの資料など、机の表面が見えないほど汚れている。

小五郎は新聞にさらに顔を埋めて聞こえない振りをした。

頬を膨らませて蘭がコナンの横に腰掛ける。

「今日はみんなどこに行くの？」

蘭がお菓子を一心不乱に頬張る元太に微笑みかけながら聞いた。

「米花記念公園です！」

光彦が元気良く答える。

「新しく桜の木が植えられて広場が出来たから、お花見に行くんだよ。蘭お姉さんも一緒に行かない？」

光彦の横に座る歩美がジューズを片手に言った。

「ごめんなさい。これから友達と約束があるの。」

「そっかあ残念」

歩美は、ごめんねと申し訳なさそうにする蘭の横に座るコナンの反応をちらりと見た。

幼いながらも歩美はコナンに好意を抱いているようだ。

彼女曰く、女の勘とやらでコナンは蘭の方に気があると思っている。そのコナン本人は話よりもついているテレビのニュースの方に夢中のようだ。

口の中の物をゴニョゴニョ言わせながら元太が口を開いた。

「おいコナンどうした？」

「ん？ああ、今のこのニュースが気になってな」

コナンがテレビを指さすと、つられて皆がテレビに注目した。今月の頭に、匿名の密告により数丁のライフルの密輸が発覚したとの報道内容だ。

「このニュースがどうかしたんですか？」

光彦が聞く。

「光彦君、鉄砲なんて怖いじゃない！ねえコナン君？」

すかさず歩美が割って入る。

「いや。単なるハンドガンタイプの銃が密輸されるのであれば暴力団関係が考えられる。しかし、ライフル、しかも見たところこれはスナイパーライフルのようだ。そうなると話が違ってくる」

小学生らしからぬ真顔でコナンが言う。

「スナッピー何とかって何だ？食いもんか？」目を輝かせながら元太が食いついてくる。

「元太君、スナイパーライフルです。スナイパーライフルというのは、

遠くからでも物を撃ち抜くことの出来る強力な銃のことですよ！」

何でも食べ物と結びつける元太をジト目で見つ、光彦が制した。

「そう。銃器の使用は確かに素人には難しいが、遠距離からの狙撃には専門的な技術、知識、経験、センスが相当に必要なだ。それを扱うなんてプロぐらいなモンだ」

腕を組みながらコナンが言う。
ますます子どもらしく見えない。

「プロというと、コナン君まさか…」

光彦の顔がこわばる。

「ああ、警察、軍隊関係者、それに殺し屋だ」

「本当にコナン君は何でも知っているのね。撃ち方とか一体どこで覚えたの？」素直に感心した蘭が聞く。

「ああ、昔ハワイで親父に…」

蘭の質問に、思わず素で答えていたコナンがあわてて口を押さえる。

「あ、あつ！えと新一兄ちゃんが映画を見てたときに詳しく教えてくれたんだ！」

どつとコナンは冷や汗をかいだ。

「またあの探偵オタクだったら、小さい子に物騒なことばかり教えて！」

蘭はプリプリしながら、元太の散らかしたお菓子の包みを集めてお盆を持ち、台所の方へ席を立つた。

危ない危ない、何とかまたごまかせたかなとコナンは力が抜けた。横に座る哀が、まったく言わん素振りでジュースを口に運ぶ。

食えないなら良いやと言いながらジュースを飲み干す元太を横に、歩美と光彦は怖いねと話している。

哀が未だに難しい顔をしたコナンに近づく。

「まさか工藤君、組織が関係していても？」

小声で哀が問いかけてきた。

「いや。黒の組織だったらこんな密輸がバレるようなヘマはしない。スナイパーライフル…何か裏がありそうだ。」

「何か根拠でもあるの？」

「探偵の勘さ。」

その自信満々のコナンの顔を横目で見て、哀が一言。

「ご立派なこと。」

哀らしい冷めた言い方だ。

しかし、スナイパーライフルとなると最悪大きな事件になりかねない。きつと密輸は今回だけではないだろう。

間違いなく国内にライフルが密輸されている。

人を狙撃する場合、技術的リスクはあるが、標的と距離を広く取れるメリットもある。

人の手に渡って誰かが狙撃されるようなことがあれば…

自分の嫌な勘が当たらなければ良いが、とコナンは目の前のお茶菓子を手を取った。

先ほどから背を向けて肩を震わせながら唸っていた小五郎が、悲鳴にも似た声を上げて急に立ち上がった。

「ああ！後ちよつとだったのに！何で後一步踏ん張れないのよ?!」

小五郎は競馬新聞を辺りにまき散らしながら、イヤホンで聴いていたポケットラジオに噛みついた。

まあ、嫌な予感を感じさせないほどおっちゃんはいつも平和で羨ましいなど、小五郎の放った新聞紙を頭から被ったコナンは苦笑した。

タイトル

名探偵コナン

円空の

狙撃手>スナイパー<

THE SNIPER

STANDS

ON

DARK SKY

” 高校生探偵また事件解決！ ”

” 密室殺人の謎を解く！ ”

新聞の一面で大々的に報じられ、写真では端正な顔立ちの少年がポーズを決めている。

彼は高校生探偵：工藤新一。

一時はマスコミでかなりの話題になったこともある。

しかしある出来事が彼の人生を一変させ、表舞台から工藤新一が姿を消すことになった。

彼はある日、幼なじみで同級生の毛利蘭と遊園地に遊びに行つて、黒ずくめの男の怪しげな取引現場を目撃した。

取引を見るのに夢中になっていた彼は、背後から近づいてくるもう一人の仲間に気づかなかつた。バットで後頭部を殴られ新一は気を失った。

彼はその黒ずくめの男に毒薬を飲まされ、目が覚めたら…

体が縮んでしまっていた！

信じられないだろうが、小学一年生ほどの大きさになっていたのだ。その毒薬によって命が奪われなかっただけ幸運と見るべきなのか。辛くも現場から脱出した新一は、以前から交流のあった（ヘンテコ）発明家：阿笠博士に事情を話し、協力を仰いだ。

工藤新一が生きていると奴らにバレたら、また命を狙われ、周りの人間にも危害が及ぶ。

阿笠博士の助言で正体を隠すことにした新一は、蘭に名前を聞かれて、すぐ近くにあった本の作者の名前をつなぎ合わせ、とつさに”江戸川コナン”と名乗った。

コナンは黒の組織の情報をつかむために、父親：小五郎がが探偵をやっている蘭の家に転がり込んだ。

ところがこの小五郎のおっちゃん、とんだヘボ探偵で…

阿笠博士の発明した多くの道具が体の小さくなってしまった新一

コナンをサポートし、幾多の事件を解決に導いてきた。

どんな風に解決してきたか、もう説明しなくても分かるでしょう。

現段階で新一に戻れない以上、周りに怪しまれない為にコナンは帝丹小学校に通っている。

コナンが”少年探偵団”をくまされている同じクラスメイト、明るく元気な吉田歩美、頭脳明晰な円谷光彦、リーダーで食いしん坊の小嶋元太、そして一際大人びている灰原哀。

灰原哀、本名：宮野志保。

彼女は黒ずくめの男たちの仲間だったが、組織に姉を殺され、組織を逃げ出す際にコナンが飲まされたのと同じ薬を飲んで体が縮んでしまった。

元々その薬を開発したのは彼女自身だったのだが、死を覚悟して服毒した。

組織の施設からの逃走に成功した哀は阿笠博士に助けられ、今も小学生の振りをしながら彼の元で解毒剤の開発を急いでいる。

コナンの正体を新一だと知る者が、阿笠博士と哀以外にもいる。
新一の両親、世界的ベストセラー推理作家の工藤優作、伝説の元アイドル女優の工藤有希子だ。

一応コナンは二人の遠い親戚の子という設定になっている。

コナンは、先の”ノアズ・アーク事件”以来、多忙を極める優作とは会っていない。

黒の組織や日々発生する難解な事件との戦いに、コナンの休めるときはない。

そんな彼はいつもある信念を胸に難問に立ち向かう。

” 真実はいつも一つ！ ”

博士のクイズ(1)

「俺もう腹ぺこだぞ!」

一番に声を上げたのは元太だった。

愛車のビートルで毛利探偵事務所まで迎えに来る約束をしていた阿笠博士が、二十分ほど遅刻してやってきたのだ。

子ども達を何とか車に乗せたは良いが、やはり攻撃にあってしまっ
た。

「すまんすまん、ちょっと野暮用でな。」

阿笠博士の恰幅のいい体が縮こまった。

「元太君さっきもコナン君ちでお菓子たくさん食べてたじゃないで
すか!」

すばやく光彦が突っ込む。

「そんなに食べてまた太っちゃったら、今度こそこの車に乗れなく
なっちゃうよ?」

歩美のきつい一言に、ドキリとしながらもうるせーなと元太が反論
する。

「ははは。狭い車で悪かったのお」

もはや阿笠博士も笑うしかない。

助手席に座る哀は、車内の騒ぎをすました顔で聞き流していた。

「分かった。それでは、ワシが遅刻したお詫びにクイズを出そう！」

苦し紛れながら阿笠博士が半ば思いつきで提案した。

何かしらの催し物がある時飛び出る、博士恒例のクイズだ。

「ここで来ましたか」

光彦が隣に座る元太、歩美、コナンに小声で話しかける。

「またダジャレクイズかな？」

歩美も小声で答える。

文字通り大抵答えがダジャレじみていて皆の失笑を買うのだ。

「謝ってるんだし、とりあえずつき合ってやろうぜ。」

元太がいたずらっぽくにやける。

（丸聞こえなんじゃが…）

阿笠博士が苦笑する中、コナンと哀もつられて苦笑している。

「では問題じゃ！今から桜を見に行くのじゃが、桜は咲いてから散るまでがとても早い。では、動物ではどうか？次の動物でスピードをつけると一番速いのはどれか？1：ゾウ、2：サイ、3：カバ。さあ、どれかな？」

出題するときはいつもそうだが、今回も博士は自信満々な顔つきだ。コナンと哀を除く少年探偵団の面々は大いに首を傾げながらうなづいた。

博士のクイズ(2)

コナンと哀はすぐに答えは解けたようだ。

「博士え、これ答えそのままじゃないかあ？」

コナンがつまらなそうに博士をつつく。

もうコナンは分かったのかと、負けじと少年探偵団は答えをひねり出そうとしている様子だ。

「哀君はどうじゃ？」

ちらりと横目で大人びた少女を見ながら博士が聞いた。

「せっかく暖かくなってきたのに…私はパス」

相変わらず遠回しの言い方がキツい哀だ。

コナンがその様子を見て苦笑する。

「はい！3番のカバ！」

歩美が嬉しそうに手を挙げて答える。

「それは何故かな？」

博士がいたずらっぽく返す。

「カバは水の中だとゆったりだけど、陸ではきつと速いよ！」

「ブー、残念！」

「1番のゾウだ！」

身を乗り出して元太が答える。

「何故かな？」

「デカイし足も長いから走れば一番速いよ！」

説明が苦手ながらも、元太は精一杯答えた。

「ブー、残念！」

えー！と元太は悔しそうな顔を浮かべる。

「それじゃあ、二番のサイですか？」

まだ答えていなかった光彦が不安げに言う。

「何故かな？」

声色からして博士がにやついているのがよく分かる。

「うーん、分かりません」

光彦が残念そうに肩を落として答えた。

ここぞとばかりに人差し指を立てて、コナンが少し身を乗り出した。

「答えは2番のサイだよ！」動物にスピードをつける”。スピード

「速い。ってことは、サイと速い。サイ速…最速」一番速い」

な？とコナンが我らが少年探偵団を見ると、なるほどと納得しながらもやっぱりダジャレギャグじゃないかとおつつこみを入れた。

「上着を一枚持ってくるんだったわ」

腕組みした哀がぼそりと助手席からこぼす。

ははは。と、皮肉混じりながらも冗談を飛ばす哀を見ながらコナンは苦笑した。

「さあ皆、そろそろ着くぞ。降りる準備をしてくれ。」

博士に声を掛けられ外を見た子ども達は、わあと声を上げた。

窓の外には桜の木が目一杯広がっている。

公園の外壁に沿って植えられている桜の木は、まるで雪のように花びらをひらひらと舞わせている。

少年探偵団は興奮したのか、さつくらさくらと、桜のテーマとか言うオリジナルの歌を歌いだした。

阿笠博士のビートルが、楽しい歌と共に駐車場へ吸い込まれていた。

米花記念公園にて（１）

ビートルが駐車を終えると、元太、歩美、光彦の順番で、わー！と声を弾ませて車から飛び出した。哀もその後ろから無言で保護者のようにそっとついて行く。

「これこれ、あんまり走ると危ないぞ」

遅れて運転席から降りた阿笠博士が声をかける。

「はい、と揃って返事しながらも彼らは聞き流すように駆けていく。博士と同時に降りたコナンは満開の桜を見上げた。

こんな桜をちゃんと見るのは、以前小五郎が依頼を受けて一緒に京都へ行った時以来か。

「新一」

ビートルの荷台で何やらごそそとやりはじめた博士が、背を向けるコナンに声を掛けた。

「ほれ、前に新一が頼んでいた道具じゃ。テストまでは出来なかったんだが、ある程度の安全性はあるはずじゃ。今日遅刻したのは、これを作るのがギリギリになってしまったからなんじゃよ。」

日々凶悪化する事件に対し、コナン自身も万が一の時にと道具のリスクエストを出していたのだ。

「なるほどね。サンキュー」

阿笠博士の差し出したベストを受け取り、早速着てみるコナン。

コナンの着ているシャツに良く合う赤色で、春先に着るには調度良い薄手のベストだ。

「うん。軽いし、ぴったりだよ、博士」

ベストをなでながらコナンが博士を見やる。
自慢げに博士が鼻を鳴らした。

「当たり前じゃ。ワシを誰だと思ってるんじゃ。天才発明家の阿笠博士じゃよ！」

高笑いするこの初老の自称天才発明家を横目に、コナンは愛想笑いをするのがいつものパターンだ。
すると、元太が少し離れた公園入り口から声を上げた。

「おい、コナン、博士！何やってんだよう！」

「置いてっちゃうよー！」

歩美も元太と並んで声を出す。
おう、とコナンが手で軽く合図して、子ども達の方へ博士と歩を進めた。

米花記念公園にて（２）

” 第十回米花記念公園祭 次週開催 ”

” 仮面ヤイバーがやって来る！！その他、市長やスペシャルゲストによるイベントあり！楽しいお店もたくさんあるよ ”

米花記念公園入り口の掲示板にでかかと告知の紙が張ってある。

ここでは公園が完成してから、毎年の春に市が一丸となって出店からキャラクターショー、有名人ゲストによる様々なイベントが行われ、米花町の名物になっている。

テレビの取材が入るのも珍しくなく、それも手伝って市外や都外からも観光客が来るほどだ。

今年は桜の木も新しく増やされ、特に公園入り口から園内に通じる” 桜のトンネル ” は圧巻で、集客アップに繋がるのだろう。

それと東京ドーム二個分程の大きさを誇るのも、この公園のアピールポイントらしい。

今年もやるのか、とコナンは何となくチラシを横目で見て、先に入っていった探偵団達を追って園内に入った。

園内は、春休み中というのもあり家族連れが多く、祭より一足先に出店がちらほら出現していて、にぎわいを見せている。

この桜景色にほとんど目もくれず、走り出していた歩美、光彦、元太は早速出店で何か頼んでいるようだ。

三人の後ろからゆっくりついていた哀にコナンと阿笠博士が追いつく。

「 あいつら…桜よりまず出店かよ？ 」

彼らを遠めで見ながら、コナンがポツリ。

「あら、わざわざこんな所まで来て推理小説を読もうとするどこかの探偵さんよりは、彼らの方がよっぽど花見に来た子どもらしいけど？」

すぐ横に立つ小さな探偵の手の中の物を見て、哀がさらりと言った。コナンの後ろに立つ阿笠博士が苦笑している。

言い返すに言い返せないコナンも、ははは、と哀にジト目で返すしかなかった。

米花記念公園にて（3）

コナン達が歩美、光彦、元太に近づくと、射的の出店にいた。どうやら探偵団の諸君は、まだ何十軒もあるわけではないので、園内の出店を今日中に全て制覇するらしい。

まずはすぐ目に付いた射的に入って盛り上がっていた。

三人で誰から射的をやるかと相談している。

結局ジャンケンで歩美に決まり、早速嬉しそうに出店のお兄さんから手渡されたコルク銃を慣れない手つきながら懸命に握る。

「歩美、一人二回ずつだからな」

元太が横から意地悪そうに言う。

「元太君、いちいち言わなくても分かりますよお」

横から光彦がくぎを差した。

数メートル離れたところから、哀、コナン、阿笠は親のようにその様子を見ている。

どうやら歩美はお目当てのぬいぐるみがあるらしかったが、しっかりと狙って撃ったものの、かすりもせず自分の持ち弾二発をすぐに撃ち尽くしてしまった。

「あゝあ、あのウサちゃん欲しかったのにな。」

残念だったね、と射的のお兄さんにフォローを入れられるも、歩美はがっくりと肩を落とした。

「歩美ちゃん、僕に任せて下さい！必ず取って見せますから！」

次の順番の光彦が胸に手を当て張り切って乗り出した。
以前より歩美に好意を持っている光彦にとって、ここで良いところ
を見せるのには良い機会だと胸が躍った。

「頑張つて！光彦君！」

後ろから歩美が緊張のまなざしで見守っている。

光彦も応援に応えるように、必ず歩美ちゃんのためにとってあげる
ぞ、とかなり本気の目だ。

コナンはその光景を見て、まだ自分が新一だった頃のことを不意に
思い出していた。

米花記念公園にて（４）

高校生探偵：工藤新一が幼児化してコナンになる何年も前。

米花記念公園完成後すぐ、春に開催された第一回目の祭。

当時小学一年生だった新一は、所属していたサッカーチームの地区大会終了後に、泥だらけのユニフォームのまま数人のチームメイトと共に祭りにやってきていた。

時はもう日が沈みかけた夕方。

園内の至る所に出店があり、ライトアップされて昼間のように明るく、大勢の人でにぎわっている。

新一のチームメイトは興奮して騒いでいるが、新一は我関せずと言う感じだ。

家に帰って推理ドラマを見ておけば良かったな、と情性で彼らに付いてきてしまったことを少し後悔しつつ、仲間たちより一歩下がって新一はリフティングを器用に続けていた。

小学生ながらも観察力に優れた新一は、リフティングをしながらすれ違う人々を分析していた。

今すれ違った彼氏らしき男性と歩く若い女性は、右手の指に切り傷のあとがあり、右腕に腕時計をしている。

左利きの特徴だな。

続く様に歩いてきた中年の男性は、ほのかに酔の香りを漂わせ、髪が少しつぶれている。

寿司職人だろうか。

そんな風に気を紛らわせながらリフティングを続けていると、不意に一人の少女が一瞬視界に入り、新一の動かしていた足が止まりサッカーボールが彼の足下で軽く弾む。

「わり、おめーら。俺ここで別れるわ。」

え？、とチームメイトたちが新一の急な言動に振り返って反応したが、ボールをその場に残して新一は返事を待たずに人混みの中に消えていった。

先ほど一瞬視界に入った少女に近づき、やっぱりな、と新一は確信した。

人混みから少し離れた出店の横で、一人の浴衣の少女が両手で顔を覆いながら泣きべそを描いていた。

そっと歩み寄った新一が、少女に声を掛けた。

「こんなトコで何してんだよ、蘭」

米花記念公園にて（5）

新一が声を掛けると、少し驚いたように蘭が顔を上げる。

「…新一？」

いつも笑顔で明るい蘭が珍しく見せる泣き顔を新一は直視できないでいた。

蘭もごまかすように浴衣の袖でゴシゴシと涙を拭いて、無理に笑顔を作った新一に見せた。

「ううん。何でもないよ。」

「何でもねーことねーだろ。」

新一はさらに蘭に歩み寄って、ポンと優しく頭に手を置いた。言葉はぶつきらぼうでも、新一の優しさが手から伝わってくるのが蘭にはよく分かった。

その温もりが蘭をとても落ち着かせた。

「園子ちゃん達と一緒に来てただけだね、気が付いたらはぐれちゃったの。頑張って探したんだけど見つからなくて、人がいっぱいいるし、道にも迷っちゃって…」

新一がいてくれることの安心感と共に、迷ってしまったときの恐怖感が一気にぶり返してきたのか、蘭の瞳からまた涙が流れ出してきた。

確かにこの人混みじゃあ人探しをするのは大人だって難しいし、まして小学一年生にはこの公園は広すぎる。

一人で心細くて不安なのはよく分かる。

普段はちよつとした喧嘩は日常茶飯事の二人だが、蘭が泣いているのを目の前になると、さすがの新一もどうしたらいいか分からなかった。

「ほれ。俺と一緒にいてやつから、もう泣くな。」

新一がハンカチを差し出すと、ありがとう、と言って蘭が受け取る。

蘭が落ち着くまでベンチに座りながら様子を見ていた新一が聞く。

「園子たちは後で探そうぜ。それより、オメーどっか行きたかったトコあんじゃねーの？」

「何で分かるの？」

泣きやんではいるが、顔が赤くなっている蘭が答える。

「オメーと園子たちがここに待ち合わせしてたのは五時だろ？今はまだ六時過ぎ。いつも祭の出店を全部まわりてーってはいやぐオメーを見てりゃ、一時間じゃ時間足りねーのくらい分かるよ。しかもはぐれて一人で探し回るのに時間使つてりゃなおさらだ。」

新一が推理を話すときのいつもの自信顔を見せた。

私が五時にここに来るって知ってたんだ、と蘭はクスリと笑った。

「な、何だよ？」

「新一って、何だかんだ言って私のこと心配してくれてるよね」

「バ、バーロー！そんなじゃねーよ！」

新一が蘭から顔を赤らめながら目線をそらして、慌てて立ち上がった。

素直じゃないな、と蘭が新一の背中を見つめている。

「射的！」

背を向けた新一に蘭が声を掛ける。

「あん？」

「射的に行きたかったの。可愛いぬいぐるみがあつてね。欲しいと思ったの。」

蘭も立ち上がって新一の横にたつた。

頬の赤く染まった蘭の顔が妙に可愛く見えて、新一はまた少し目線をそらした。

「わあつた」

そう言うとなしは蘭の手を握って人混みの中へ向かって行こうとした。

「またはぐれんじゃねーぞ。」

蘭も新一の手を力強く握り返した。
蘭には新一の背中が大きく見えた。

米花記念公園にて（6）（前書き）

投稿話数も10を越え、ユニークアクセスも2,500を突破しました。大変ありがたく思っております。中々連載スピードが上がらず、ストーリーも始まったばかりでまだあまり核心に触れていませんが、今後ともよろしく願います。

米花記念公園にて（6）

すでにほとんどの出店の位置を把握していた新一は、迷うことなく蘭を射的へ連れて行った。

「おっ、いらっしやい！可愛いカップルだね！」

射的の主が威勢の良い声を目の前の小さい二人に声を掛けるが、当の二人は顔を赤らめていて、男の子の方は顔をそらしている。つながれたままの新一と蘭の手元を見て店主は思わず顔がほころんだ。

早速蘭は一回分頼んで一番上の段の右端にあるウサギのぬいぐるみを狙うが、三十センチ程高さがあつて重いのか中々落ちない。

「えー何でー？」

声を上げて悔しそうな表情を浮かべる蘭の横で、新一は頬杖をついてその様子を見ている。

結局、弾のコルクを全部撃つても倒すことが出来ず、蘭は肩を落とした。

残念だったね、と主から声を掛けられる蘭の横から新一が身を乗り出した。

「ちょお、貸してみ」

いつの間にやら一回分の料金を払った新一が、蘭の手からコルク銃を受け取る。

慣れた手つきで銃を触ってみて、構える。

素人目で見ても明らかに分かるほどプロに近いきれいな構えだ。

急に射的に乗り出した新一に蘭は驚きつつも、もしかしたらぬいぐるみを取ってくれるのかも、期待が高まった。すぐさま一発目を撃った新一だったが、ウサギのぬいぐるみに当たるところかかすりもせず、向こう側へ飛んで行ってしまった。

「やっぱり新一にもだめか…」

残りは後四発。

この調子では、とてもあのぬいぐるみはとれない。

蘭は落ち込みながら射的に興じる新一に背を向けて、他の出店を見始めた。

仕方ない、次は何か食べようかな、と小腹の減ってきていた蘭はやきそばなどの出店を目で探す。

ぬいぐるみくらいでそんなに落ち込んで仕方がないよね、と元来前向きな正確な蘭は気持ちを切り替えようとした。

すると不意に蘭の視界を白いものが遮った。

急なことで驚いた蘭は思わずその白い物を両手でつかんだ。

「え、これ…」

ピントが合うと、蘭の両手にあるのは先ほど逃したウサギのぬいぐるみだった。

「ほれ、やるよ。欲しかったんだろ？」

蘭の背後からぬいぐるみを目の前に差し出しながら、新一が恥ずかしそうに立っている。

「ありがとう！」

ぬいぐるみをぎゅっと抱きしめて嬉しそうに見つめた蘭が、新一に笑顔を向ける。

「一生大事にするね！」

欲しかったぬいぐるみだっただけでなく、新一がとってプレゼントしてくれたということが本当に嬉しくて、蘭から本気で出た言葉だった。

「バーロー大げさなんだよ」

顔を赤くして照れ隠しでつい不器用な言葉を発してしまったが、目の前で本当に嬉しそうにぬいぐるみを抱く蘭を、新一は愛おしく思いしばらく優しく見つめた。

春の夜空に桜の舞う中、遠くで花火の音がした。

米花記念公園にて（7）

新一でいた幼少の頃を思い出し、コナンはクスリと笑った。

「あら、顔が少し赤いけど、彼女のことでも考えてたの？」

すかさず哀がコナンの横顔を見て突っ込んできた。

「そんなんじゃないよ、と言ってコナンが慌てて反論した。

結局、張り切って射的に乗り出した光彦も持ち弾を全て外してしまい、歩美と哀に良いところを見せられずに落胆の表情を浮かべた。

「やっぱり光彦君もダメかー。」

「当たっても倒れないように何か仕掛けでもしてあんじゃねーか？」

元太が本気で射的の主に詰め寄る。

「そんな事ないないと、主は景品を苦笑しながら元太に持ち上げて見せた。

「灰原さんもやりますか？」

光彦がコルク銃を持って哀に近づく。

「私はパス」

手の平を見せながら哀が即答して、コナンが横からすかさずコルク銃を受け取る。

「俺がやるよ！」

コナンは残りの四発を使って一気に景品を倒していき、その様子を見て少年探偵団は驚きの声を上げた。

結局コナンは全発命中させ、歩美と哀にはクマのぬいぐるみ、元太と光彦には仮面ライダーのソフビ人形をプレゼントした。

歩美、元太、光彦は、普段は背伸びした姿を見ているが、その時は子どもらしくコナンに揃って礼を言った。

あまりプレゼントなどもらうことに慣れていない哀は、珍しくその端で照れたように俯いていた。

「ほれ哀君もお礼を言ったらどうじゃ？」

意地悪っぽく阿笠博士がつつく。

「…あ、ありがとう。」

あまり感情を見せない哀が顔を心なしか赤らめつつ、コナンと目を合わせずに小声で言った。

コナンはいつもの自信満々の顔を見せている。

歩美、元太、光彦はその横でお互いにコナンからプレゼントされた景品を見せ合ってはしゃいでいる。

哀も貰ったクマのぬいぐるみを見つめて優しく微笑んだ。

米花記念公園にて（８）

「おお、良いですねえ」

不意に阿笠博士の背後から、こちらに向けられる男性の声がした。はしゃいでいた三人やコナン、哀、博士も声の主の方に振り返った。細身で長身の男性がデジカメを片手に立っている。

「あ、失礼。私、こう言うものです。」

鼻をすすりながら、男性は名刺を阿笠博士に差し出した。

「渡辺^{わたなべ} 公彦^{きみひこ}さん？」

「はい。私、市長の補佐をしている者です。今度の米花記念公園祭に市長も参加するので、その下見をしております。園内もこれで撮影しながら、会場の普段の様子を写真におさめておりまして、ぜひお子さんたちに被写体になっていただきたいなど。」

鼻をすすりながら渡辺が笑みを見せると、細目の目が余計に細く見える。

「おつ、写真かよ！おい、皆写ろっぜ！」

元太が声をあげるなり、光彦や歩美も無理矢理コナンや哀を引っ張ってきて、フレームにおさまるため肩を寄せた。

ピースピース、とポーズを決めながら探偵団は渡辺をせかして何枚も写真を撮らせた。

はしゃぐ三人の横で、哀は腕組みしながら落ち着いた態度を見せ、

コナンはジト目で苦笑している。

元々子ども好きなようで、相変わらず鼻をすすりながらも渡辺も「良いですね」と連呼してシャッターを切る手を休めない。

すると、急に渡辺が苦悶の表情を浮かべてその場にうずくまった。

「だ、大丈夫かね？」

すぐ背後で見ていた阿笠博士が駆け寄り、哀もそれに続く。

渡辺は冷や汗をかいて息も切らしている。

「すみません。ちょっと休めばすぐに落ち着くんで。」

全身に激痛でも走ったような表情を浮かべながらも、渡辺が無理して笑顔を見せる。

「まあ鼻も調子悪かったみたいじゃし、花粉症で風邪に似たような症状も出るからのお。」

「ええ、そ、そうなんですよ。毎年いつもこうで…」

幾分か渡辺の苦痛が引いてきたようで、表情も和らいできている。

「…マスク。」

不意に声をかけられた渡辺は、大人びた雰囲気を持つ少女と目が合った。

「鼻腔の粘膜を守るには、原始的だけどマスクが一番よ。」

「ありがとだね、お嬢ちゃん。今度からそうするよ。」

「まあ、それが嫌だったら部屋を閉め切ってじつと閉じこもっている事ね。」

あまりの冷めた言い方に、コナンがおいおいとジト目で哀を見る。これから広場なども下見をしなければならぬから、と渡辺は探偵団たちから離れていった。

広場へ向かう途中もあちこち写真におさめながら歩いているが、まだ体が痛む部分があるのか、渡辺の歩き方が少しぎこちない。

「僕たちは花粉症じゃなくて良かったですね！」

渡辺の後ろ姿を見ながら光彦が言う。

「くしゃみとか辛そうだもんね。歩美のお母さんも花粉症でティッシュが手放せないって。」

歩美もぬいぐるみを抱き寄せながら言う。

「俺なんか風邪すら引いたことないぜ！」

自慢げに元太が割って入ってくる。

「花粉症つてのは誰でもなりうる、アレルギーなんだよ。型が合って、潜伏期間が明ければ、いつ花粉症になってもおかしくないんだ。だから、去年は大丈夫でも今年花粉症になりましたなんてざらにある話さ。おれもまだ花粉症にはなったことないから、辛さは分らないけどな。」

へえー、と皆が感心した声を出す。

そんな中、遠くまで行って小さくなった渡辺の背中を、哀は難しい

顔をして見つめていた。

蘭と園子（１）

帝丹高校に在学する蘭の同級生で親友の鈴木園子は、ふてくたれた顔をしていた。

頬にはホコリがついてうつすら黒くなっている。

「ちょっとー。蘭、これいつになったら終わるのぉ？」

同じ部屋の反対側で作業する蘭に園子が悲鳴を上げる。

「まだ半分も終わってないわよ？園子ったら、自分でついでだからって言ってついてきたんじゃない」

蘭が黙々と作業する手を休めずに答える。

ここは蘭のもう一人の同級生で幼なじみの新一の家、工藤邸。

新一の両親は仕事で長期間家を空けていて、新一がほとんど独りで住んでいた。

しかしコナンとなつてしまった新一は、その小さくなった姿でここに住めるわけもなく、蘭の家に正体を隠して厄介になっているわけだ。

そんな事実を知らない蘭は、無人の工藤邸を定期的に清掃にやってくるのだ。

ただでさえ広いこの工藤邸で先の見えない清掃を目の前に、園子が乗りで蘭についてきてしまったことにひどく後悔した。

「はあ、こんなうららかな日に、私みたいな美少女が誰かさんの無責任な”旦那”の家を掃除に来ているなんて…」

よく園子は新一の事を蘭の”旦那”とからかうことがある。

旦那じゃねー、とそのたびに新一は即答していた。

「もう！そんなんじゃないったらー。この家いつまでも放っておいたら、本当にお化け屋敷になっちゃうでしょ？誰かがやらないと。」

現に無人状態の続くこの工藤邸は、近所の子どもたちにはあることないこと噂を立てられ、”お化け屋敷”としてちょっとした有名スポットになっている。

蘭と園子（2）

お母さん気質の強い蘭にとっては特に放っておけない代物だろう。

「また蘭はそんな事言ってえ。」いつ新一のお嫁さんになっても良いように、このお家でどんどん花嫁修業しなきゃ。そうすれば新一の両親にも認めてもらえるわぁ」って思ってるんでしょ？」

意地悪っぽく園子が、目を輝かせ両手を合わせながら、自身の勝手な蘭像を演じた。

このように新一の妄想ネタで園子は蘭をからかうこともしばしばある。

たまに蘭が先手を打って、園子に意地悪っぽく言うときもあるが、今回は園子が先だった。

「もう園子ったら。ケーキバイキングおごってあげないから。」

蘭は工藤邸の清掃が終わってから、園子と米花駅前のレストランのケーキバイキングに行く予定だった。

この不景気の中でも多角経営で業績を伸ばす鈴木財閥の一人娘で、お嬢様の園子も金銭感覚は普通の女子高生と変わらないようで、ケーキバイキングには弱いらしい。

今回は蘭のおごりという事で、調子よく

「ついだから」と言っただけで工藤邸についてきたは良いが、結局このような流れになるのがいつもの落ちだ。

「ああ！ごめんなさい、蘭・オブ・ジ・エンジェル様！ちゃんと手伝うので、それだけのご勘弁を！」

両手を合わせたまま蘭に頭を下げる園子。

「うむ。よろしい。そなたの願い、叶えてしんぜよう。」

蘭も園子の調子に合わせて言い、二人で顔を合わせてこのおかしな会話に笑い合った。

予感

都内某所。

高架下の薄暗いコインロッカー。

あまりコインロッカーの利用者もいず、メンテナンスもろくにされていないのか、錆が目立ち始めている。

さりげなく辺りを見回して人気のないのを確認し、男はしゃがみ込んでコインロッカーに鍵を差し込む。

金属のこすれる音を立てながら扉が開き、素早く二つのアタッシュケースを取り出す。

辺りをさっと見回し、男は再度人気がないのを確認した。

男はコインロッカーの自らの触れた部分に付着した指紋を布で拭い、さつと扉を閉じる。

高架を電車が通過し、振動とともに轟音が壁に反射してけたたましく響く。

コインロッカーもギシギシと音を立てながら揺れる。

電車が高架を通過し終えると、男の姿は霧のように消えていた。

都内某ビルのある一室。

床にアタッシュケースを置き、ふたを開けて中身を取り出す男。

いくつかの筒状の物を取り出し、慣れた手つきで組み立てていく。

男の手には、望遠用スコープとサイレンサー（消音器）の付いた、組み上がったスナイパーライフルが握られている。

弾を入れるマガジン（弾倉）をライフルに押し込み、男が立ち上がる。

弾を装填するためのコッキングレバーを引き、窓際に立つて構える。
スコップの照準を覗きながら調整し、

男は息を止めて引き金を引いた。カチッ！

小気味よい音をライフルが立てる。

組立から試しの空撃ちまで” 予行演習 ” がテンポ良く行き、息を吐
きながら銃の構えをゆるめ、男は不気味な笑みを浮かべた。

接触（１）（前書き）

投稿に大分間が空いてしまいました。温かく見守っていただければ幸いです。意見、感想も書き込んでいただけると大変嬉しいです。遠慮なくお願いします。

接触（１）

都内。

警視庁、捜査一課。

「目暮警部！」

中肉中背の若い男性刑事の高木が小走りに駆け寄る。

高木の後ろから後輩刑事の千葉もついてくる。

目暮と呼ばれた、茶色い背広に帽子がトレードマークの、恰幅の良い男が振り返る。

「どうした？」

小汗をかいている千葉から受け取った一枚の紙を高木が目暮に渡す。

「署へ直接、何者からか犯行予告がメールで届きました。送信者を特定中ですが、妨害工作をされているようで困難とは思いますが……」

高木の横に並んで千葉が真剣な面もちで言った。

送信されてきた犯行予告の内容は、『今日の夕刻、米花駅前にて公共交通機関を襲撃する』と言う、警察に対して一種挑発めいた内容だった。

「よくあるいたずらではないか？先日似た様な内容のいたずらメールを警察に送って、中学生だったか１５歳の少年が検挙されたじゃないか。」

目暮が半信半疑に言った。

目暮の横に立っていた佐藤という、リクルートスーツをビシッと着

こなした端整な顔立ちの女刑事が写真付きの資料を机に広げて言う。

「警部もご存じとは思いますが、最近狙撃により銃弾を撃ち込まれる事件が三件ほど発生しています。」東米花書店の窓ガラス”、”自動販売機”、”駅前噴水の石像の胴体”…分析されたライフルマ―クから、どれも同じ銃から発射された弾だと鑑識から報告が入っています。死傷者が出ていないのが幸いと言うべきか…」

同時に高木が口を開く。

「今回送られてきた犯行内容には、一連の犯行についてニュースや新聞で報道されていない、犯人しか知り得ない”銃の口径”や”詳細な狙撃時間”等の情報も書かれていました。そこから、同一犯と見てまず間違いはないかと…」

「それは本当かね?!」

目暮の顔が一気に強ばった。

平日とはいえ米花公園記念祭を控えた春休み期間中、駅前是人でにぎわっている。

もし公共の交通機関を襲撃などされたら、人為的・経済的被害は計り知れない。

目暮の決断は早かった。

「直ちに千葉君は各交通機関に通達！高木君と佐藤君は、SATの要請、さらに可能な限りの応援と救護を連れて現場に向かってくれ！なるべくパニックを未然に防ぐよう頼む！」

その場にいた一課全員が返事をして一斉に部屋を飛び出し、目暮も後続く。

最悪な事にならなければいいが、と目暮は強く願った。

接触（2）

同日、同時刻。

米花駅前大通り。

日も落ち始め空が赤く染まり始めている。

普段この時間帯は割と通りは混むのだが、幸いにも今日は空いている。

少年探偵団一行を乗せた阿笠のビートルは快調に帰路を進んでいた。米花記念公園で散々はしゃいで疲れたのか、歩美、元太、光彦は子供らしい寝顔を見せてスースー寝息をたてている。

助手席に乗っている哀はコナンからもらったぬいぐるみを抱きながら、どこことなく車外を見つめている。

コナンはコナンで、やっと静かになった子供たちの横で、先ほど哀に指摘された推理小説を思う存分読みふけている。

最近のコナンも、遠出した先で海賊のお宝事件に巻き込まれたり、遊園地で蘭たちを人質に取られてやっかいな事件を命がけで解決させられる羽目になったりと、かなりタイトな日々を送っていたため久しぶりにゆつくりと小説を読めたのだった。

ハンドルを握っている阿笠も、普段はよくしゃべるのだが、さすがに子供たちの相手で疲れたのか、めっきり口数が少なくなっている。米花駅前大通を進むビートルがそろそろ米花駅に近づいてくると言うところで阿笠が口を開いた。

「新一、そろそろ着くから皆を起こしてくれんか」

「ん？おう」

いきなり小説の世界から現実に戻されたコナンは気の抜けた声で返事をした。

助手席からクスツと哀の笑い声がかすかに聞こえたが、それを横目にコナンは小説を閉じて右隣に座る三人を起こすために右を向いた。不意に車窓から見える遠くのビルの屋上辺りが小さくキラリと光った。

何かの悪寒がコナンの体を走った。

パリン！

バラバラッ。

「うお、何じゃ?!」

突然のことに阿笠が驚き、隣の哀も目を見開き言葉をなくしている。音の先をコナンが見やると、ビートルのフロントガラスに細かい何かの破片がバラバラと降り注いでいる。

バンッ！

ガタガタガタッ！

何かの勢いよく破裂する音と共に何か大きな物がこちらに近づいてくる。

車外を見て今起きている光景をコナンは信じられなかった。

右隣の車線を併走していたバスが、轟音を立てながらこちらに猛スピードで近づいてくる。

「ハンドルを切るんだっ！博士えっ!!」

接触（3）

猛烈な衝撃と共にバスの側面に体当たりされたビートルは、その反動でハンドルを左へ取らる。

必死でハンドルを握る阿笠だが、全くハンドルが言うことを聞かない。

火花を散らしながらバスがどんどん左側へビートルを押しやり、縁石とタイヤが擦れビートル全体が激しくきしむ。

ビートルが縁石とバスに挟まれる形になるが、いつこうにバスが左へ押す力が止まない。

「新一いつ！」

阿笠が悲鳴を上げる前にコナンは素早く後部から運転席の方へ身を乗り出す。

後部座席の子供たちも衝撃で目を覚まして、互いにしがみつき合いながら悲鳴を上げている。

一瞬バスが右にそれ、ビートルと離れる。

「このままだとバスに押されて縁石を乗り越えて歩道に突っ込んでしまう！何とかバスを止めるぞ！」

またバスが勢いよくビートルにぶつかり、コナンが衝撃で左によろけた。

とっさの阿笠の判断で、ハンドルを握る博士の両腕でコナンを挟み支える。

その間にもバスがビートルから離れてはぶつかるを繰り返し、その度にガラスや何かの破片が飛び散る。

右へ方向をそらそうとしていることから、バスの運転手も何とか車

体を支えようとしているようだ。

「コナン！」

「コナンくん！！」

後部の子供たちも涙声になっている。

一か八かしかない、とコナンは決意を固めた。バスがビートルから離れた瞬間、コナンは博士と共にハンドルを握る。

「今だ博士！アクセルを目一杯踏めえ！」

バスと縁石に車体をこすりながら、ビートルが勢いよくバスの前に躍り出た。

接触（4）（前書き）

何とか20話まで連載を進めることが出来ました。これからも応援をよろしくお願いします。∴さあ、絶体絶命のコナンたちの命運やいかに?!お楽しみに!

接触（４）

不安定に蛇行して走行するバスの目の前にビートルがつく。
バスもブレーキが利かないのか、一向にスピードが落ちる気配がない。

数百メートル先には交差点がある。

そこに突っ込んでしまえば間違いなく大惨事は免れない。
被害を最小限にとどめ、すぐにでもバスを止めなくては！

コナンはバスの不規則な動きをサイドミラーとルームミラーを見て確認する。

「みんなしつかり掴まってる！」

ビートルの後部に座る子供たちは歯を食いしばり、さらに力強くお互いにしがみつく。

一瞬、バスの走行が一直線になったのをコナンは見逃さなかった。

「博士！アクセルを離してハンドルはこのままだ！いくぞーっ！」

コナンは運転席から飛び上がり、ブレーキを全体重を掛けて踏みつけた。

ギャギャギャー！ドン！！

タイヤが地面にこすれる音とともにビートルに重量感のある猛烈な振動が走る。

ブレーキをかけたビートルにバスが突っ込み、二台とも火花を散らしながら地面を滑っていく。

頼む、止まってくれ！とコナンはブレーキを踏む力をより強めた。

交通量の激しい交差点が目の前まで迫る。

ガガガッバン！

あまりの負荷にビートルの右前輪が悲鳴を上げて破裂し、勢いよく火花を散らす。

バスとの接触による衝撃で損傷したビートルの車体は、もう長くも持ちそうにない。

だめだ、もう交差点に突っ込んでしまう！

コナンすら絶望視し、正面から顔をそらすように目を閉じた。

接触（5）

米花駅前大通りと交差する中央通りを走る車の列が、信号を無視してバスと共にこちらへ突っ込んでくるビートルに気づき、一斉に車列を乱し始めた。

アクセルを全開にする者もあれば、急ブレーキをかける者もあり、中央通り側は通行が一気にストップする。

交差点を通過するバスとビートルは、側面やフロントを他の車と激しくこすりながら、ガクンと勢いよく停止した。

あまりにも急な出来事に、辺りは時間が止まったように静まりかえった。

うつすらと煙に包まれたビートルの車内で、目を開いたコナンは静止してから少し間を置いて現状に気が付いた。

止まってる…止まったんだ！とコナンは興奮する気持ちを抑え、同乗者の安否を確認する。

「皆大丈夫か？！」

車内を見回すとどうやら皆気絶しているだけで、何とか無傷のようだ。

後方のバスからも乗客や運転手の声が聞こえることから、大事には至っていない様子だ。

ふと、遠くの方から各種緊急車両のサイレンが近づいてきているのが聞こえる。

コナンはその安心感から、どっと全身を脱力感が襲った。

その頃、その事故現場へ緊急車両と共に急行している高木・佐藤両刑事は、目の前の惨状を目の当たりにして顔から血の気がさっと引

くのが分かった。

「ま、まさかこんなっ…！」

高木は息をのむようにつぶやいた。

「…どうやらギリギリ間に合わなかったようね」

交差点の中央に大型バスが突入したままの姿で停止し、後続車の玉突き・スリップ、至る所で煙が上がり、中央通りと米花駅前大通りの交通機能は完全に麻痺状態だ。

想像を遙かに超える惨状に、普段は気持ちを表に出さないさすがの佐藤も恐怖を覚えた。

「高木君、レスキューと救急搬送車の追加を要請してちょうだい」

「は、はい、分かりました！」

佐藤は冷静を装ったつもりだったが、声がかすかに震えているのを高木はすぐに感じ取った。

交際を始めたばかりの高木と佐藤だが、警官としての付き合いは短くはないため、佐藤の珍しい動揺ぶりを見て、かえって高木は冷静さを取り戻した。

無線を片手に応援を要請する高木の横で、佐藤はハンドルを握る力を強め、後続の緊急車両と共に現場へと車のスピードを上げていった。

接触（6）

同時刻、工藤邸。

工藤邸内の清掃のノルマをやつと終え、園子は疲れ切った顔でリビングのソファーに突つ伏していた。

つけっぱなしのテレビも見ているようで見ていない、心あらずといった様子だ。

リビングにはお天気ニュースのお姉さんの明るい声が響いている。普段家の掃除などはお手伝いさんがやっている園子にとっては、たまにこうやって蘭の手伝いをしているとはいえ、かなりの重労働だった様だ。

一方の蘭は慣れた手つきで掃除道具をテキパキと棚にしまっていた。

「園子」そろそろ行くでしょ？」

テーブルに乗っていたテレビのリモコンを手に取りながら、「うん」と園子は気の抜けた返事をした。

園子がテレビの電源を切るうとした瞬間、緊急ニュース放送が始まり、ヘリコプターからの中継映像に見慣れた光景が広がった。生中継のレポーターが興奮気味に状況を説明している。

「ねえこれって米花駅近くじゃない…？」

片付けを終えてリビングにやってきた蘭に園子がソファーに座り直しながら聞いた。

「え、どれ？」と、蘭が答えながらテレビを見ると、中継映像が道に沿ってスライドすると、目を疑うような光景が映し出された。

米花駅前大通りと中央通りが交差する交差点で何十台もの車が不自

然に停車し、所々で黒煙を上げている。中継映像はその交差点まで行くと、ゆっくりと旋回を始めた。

ニュースキャスターも中継のレポーターも興奮気味に交互に情報を発している。

その瞬間、蘭は心臓が驚掴みにされたように息が止まった。

一瞬、煙の間に見覚えのある黄色い車が見えたのだ。

「ねえ園子、阿笠博士って確か小さな黄色い車に乗ってたわよね？」

「ああ、あのビートルってオンボロ車でしょ？それがどうかしたの？」

蘭は唇を震わせながら、阿笠博士と共にコナン達が出掛けていったことを考えた。

米花記念公園からの帰り道は必ず米花駅前通りを使うはずだし、帰ってくる時間帯もこのぐらいだ。

さらに、この地区でビートルに乗っているのは阿笠博士くらいだ。

最悪の状況ばかり頭を巡り、蘭は混乱した。

蘭の様子に気付き、園子も

「蘭、どうしたの？」と真顔になった。

ニュースも途中でCMに切り替わり、最近売れっ子の芸人が間抜けな顔で新商品の飲料の紹介を始めた。

「…コナン君達の乗ってるビートルがあった…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834f/>

名探偵コナン 円空の狙撃手<スナイパー>

2010年10月11日01時16分発行